シロサイ“サイカ”の死亡について

当園で飼育していましたシロサイのメスの“サイカ“が 2021 年 6 月 18 日に亡くなりましたので、これまでの経緯と死因についてお知らせします。

1．個体情報

・動物種：シロサイ（愛称 サイカ）
・性別：雌
・年齢：46 歳
・体重：1400 ㎏
・外部計測値：頭胴長 265 ㎝　肩高 160 ㎝
・生年月日：1975 年（推定）
・出生地：南アフリカ

2．飼育経緯

“サイカ”は 1991 年のアフリカ園オープンに合わせて飼育を開始したオスの“サイスケ”と共に 1992 年 3 月に来園し、2 頭で展示しておりました。2002 年にオスの“サイスケ”が亡くなり、その後は単独での飼育となっていましたが、その後も元気で暮らし来園から約 29 年間と当園屈指の長期にわたり飼育した動物でした。

大人しく穏やかな性格で、体にブラシをかけながら行うマッサージを日常の健康管理として実施してきたこともあり、「サイにさわってみよう」や「シロサイと仲良くなろう」などのふれあい体験を通じ、多くの方にシロサイの魅力や野生のシロサイが置かれている状況を伝えることができました。

46 歳という年齢はシロサイのなかでも大変高齢であり、2020 年 4 月に伊豆アニマルキングダムの雌の“プー”が亡くなって以降は国内最高齢となっておりました。若い頃は病気知らずの丈夫な体でしたが、ここ数年は怪我や病気を繰り返し毎日のケアや治療が欠かせない状況でした。

3．治療経過

2020 年 8 月頃より大腿部の皮膚に潰瘍や褥瘡（じょくそう）が見られるようになり、洗浄や投薬等を行ってきました。傷の状態は良化と悪化を繰り返していましたが、個体が横臥する際、決まって右側を下にするため、圧迫により右大腿部の傷の拡大が進行していました。また 2020 年 11 月には、この治療のため投与した抗生物質の影響と運動不足が重なり疝痛（腹痛）を起こし、一時起立不能となることもありました。その後 5 日間にわたる点滴治療によって症状は回復しましたが、その後も大腿部の傷は拡大し、様々な治療を試みましたが回復せず、最近では傷の進行を極力遅らせるよう、治療を継続しながら皮膚のケアを行っていました。

こうした中、6 月 13 日朝に伏臥した状態から起立しようとするも、何度か失敗する様子と軟便が見られました。この日から胃腸薬の投与を開始し、軟便は回復しましたが、6 月 16 日に起立不

能となりました。同日より 1 日約 25ℓほど耳の血管から点滴を行い、一度自力で起立・歩行し採餌も見られました。翌１７日は起立することは出来ませんでしたが状態は安定しており、21 時頃に様子を確認した際は特に変わった様子はありませんでした。しかし、朝７時 30 分に寝室で死亡しているところを確認しました。寝室内には暴れた様子はなく、眠るように亡くなったと推察されました。

４．死亡原因の推測

加齢による腎臓、肺、肝臓などの主要臓器の機能低下、筋力低下、これらに続発した褥瘡により起立不能となり、衰弱死したものと考えられます。また、卵巣や子宮に腫瘍があり、腹腔内に転移している様子も確認されました。解剖検査の詳細は現在岩手大学獣医病理学研究室の協力を得て精査中です。

尚、骨格は東京大学総合研究博物館に譲渡し学術利用していただくと共に、骨格標本として保存することにしました。貴重な資料として、今後のサイの保護や研究に活かされることは、“サイカ”にとってこの上ない名誉なことと考えます。

５．シロサイの現状について

シロサイは生息環境の悪化や角を目的とした密猟などにより絶滅が危惧されています。国際自然保護連合（ＩＵＣＮ）のレッドリストにおいては準絶滅危惧種に指定され、亜種であるキタシロサイは 2018 年に絶滅しています。2020 年 12 月末現在、国内 12 園館で雄 17 頭、雌 27 頭（当園を含む）が飼育されていますが、飼育下での繁殖は進んでおらず、新しい個体の導入は困難な状況です。今後は展示種の変更も含めて検討してまいります。

元気な時のサイカ（2019 年５月）

令和３年６月 21 日
盛岡市動物公園 **ZOOMO**
株式会社 もりおかパークマネジメント
園長 辻本恒徳